

ピントリッキオ作《博士と議論するキリスト》に関する一考察——書物のモチーフに託された意味の諸相をめぐって

鳥山倫史(京都大学)

本発表は、1500年頃に画家ピントリッキオ(1456頃-1513)が制作したスベッロのサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂バリオーニ礼拝堂の壁画装飾のうち、《博士と議論するキリスト》(右壁)に焦点をあて、画家の特異な表現の射程を明らかにするものである。

本壁画は『ルカの福音書』第2章41節からの場面を描いたもので、数多くの書物によって特徴づけられる。これらは画中の人物の身ぶりや配置によってその存在が強調されており、本作における重要なモチーフとなっている。そこで本発表では、当時の社会情勢や壁画制作の経緯を踏まえ、知的側面、宗教的側面、政治的側面から本作での書物の描写を再考する。その上で、書物に託された意味が単に知恵や学識に留まらず、より重層的な機能を有していた可能性を指摘する。

発表ではまず、議論の出発点として、書物を抱えた博士の隣で“PINTORICHIO”と記された紙を持つ博士および、本礼拝堂の《受胎告知》(左壁)にて画家自身の肖像の上に描かれた書物に着目する。一般的に書物は、知識や学問を意味する図像として広く用いられてきた。これらを踏まえ、書物が画家自身の学識を暗示する装置として描かれていることを示すと同時に、他の作例との比較を通じてその表象の意味と機能を多角的に検討する。

次に、本作に登場する「トルコ風」の衣装を纏った博士を起点に、画中の書物に託された宗教的意義を考察する。この時代、イエスや聖人が議論する場面は、対トルコ的なものを喚起する主題として広く描かれていた。ここで着目したいのは、フィリッピーノ・リッピ(1457-1504)やヴィットーレ・カルパッチョ(1460頃-1525頃)にも明らかなように、この主題の作例の多くに書物が描かれているという事実である。ゆえに、本発表では、異教徒や不信仰の徒との争いの場面に書物が重要なモチーフとなっていたことを示す。そして、当時の社会情勢を考慮しつつ、書物がキリスト教の正統性を表す宗教的役割を担っていたことを指摘する。

最後に、依頼主であるバリオーニ家がペルージャ一帯における人文主義の擁護者であった点に着目し、本壁画制作の直前に起こった政治闘争と絡めて、書物が彼らの政治的アイデンティティを視覚的に強調する手段であったことを明らかにする。実際、画面左側には依頼主の一人トロイロ・バリオーニの隣で、大きな赤い書物を抱える人物が描き込まれている。バリオーニ家は、一族内部や他家との政争の中で、活版印刷の後援者として自らを位置付けていた。この事実を鑑み、本作における書物のモチーフに政治的役割が付与されていた可能性を新たに提示する。

上記の議論によって、バリオーニ礼拝堂の壁画装飾に新たな視点が呈され、壁画制作が画家の知的営為や同時代の社会的背景、そして依頼主の意図という複数の要素が交差する場であったことが明らかとなるだろう。